

芥川龍之介全集

第十二卷

芥川龍之介全集

第十一卷

芥川龍之介全集 第十一卷 第十一回配本(全十二卷)

一九七八年六月二十二日 發行 ©

定價三二〇〇圓

著 者 芥 川 龍 之 介

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 〒100 東京都千代田區一ツ橋二五五
株式會社 岩 波 書 店

電話 〇三二五二
振替 東京六二五〇

落丁本・亂丁本はお取替いたします

書

簡

二

大正九年

六三九 一月二日 田端から 南部修太郎宛（葉書）

啓来る六日泡鳴先生我鬼窟へ参り候間御來駕の上御清話下さるまじく候や伺上候 草々

芥川龍之介

六四〇 一月九日 田端から 小島政二郎宛

啓 Blood & Sand は Ibanez の作と知り候 Ibanez は Spain の Zola と稱されし人、作風御想見なさる可く候未見の書ながら恐らく大兄には向かなかる可き乎この頃素堂句集を読み天明に至つて蕪村の出でたる偶然ならざるを知り候言水は目下諸方詮索中短歌私鈔など讀むと歌も作りたくなりますなこんな調子の歌を

藤咲くや日もうら／＼と奈良の町

一月九日

我 鬼

小島様 梧右

大正九年

六四一 消印一月十三日 下谷區下谷町一ノ五 小島政二郎君 (速達印)
龍 (葉書)

昨日社へ参りし所自由画展覽會の相談永びきし爲典山を聞きに行けなくなり再三君の所へ電話をかけしも不通とう
くお流れになりし とりあへず御詫びまで

二伸 十六日夜参りたけれど如何にや

六四二 一月十七日 田端から 中戸川吉二宛

拜啓 高著を頂き難有う君はインフルエンザにて入院中の由僕もインフルエンザで寝てゐる始末だ精々癒りつこの
競争をしよう 右とりあへず床上よりお禮まで 頓首

一月十七日

芥川龍之介

中戸川吉二様

二伸 装釘の黒い色はロオルをかけなかつた方がよかつた 再版からロオル無しにしては如何

病 我 鬼 拜

六四三 一月十七日 田端から 中戸川吉二宛 (封筒に小石川病
院内流行性感冒患者中戸川吉二様とあり)

物干しへ蒲團と机とを出して原稿を書いてゐると僕の知つてゐる女が「これを捨てて下さい」と云つた受取つて見
ると死んだ金魚だから物干しの下へ捨てた下には蒼い海が少し見えたするとその女が「あなたも捨てゝお貰ひなさ
いよ」と云つた「あなた」と云はれた女はお夏に違ひなかつたお夏は手のひらへ何か入つてゐるのを僕の手のひら

大正九年

の上へあけた見ると水の中にぼうふらが五六匹泳いでゐた何故かその時中戸川が焼かなければ好いと思つた「水族館でござい」と云ふ聲がした聲の主は春樹さんだつたパツチに尻端折りで皮の鳥打帽をかぶつてゐた何が水族館かと思つたら扇子で僕の手のひらの中のぼうふらを指してゐた太鼓持のやうな嫌な奴だなと思つた雷が鳴つた僕の知つてゐる女が「雨がふるからこつちへおはいんなさい」と云つたその女はお夏と一しよに二階にゐた二階には朱ぶちの夏目漱石の額があつて鏡蒲團が澤山敷いてあつた お茶屋か何かの大廣間らしかつた實際雨がぽつ／＼降つて來た 上を見たら向うの屋根の上に繭玉のやうな雲が青い空に白くぽつ／＼浮んでゐた「あれは雷が鳴るから電氣で雲が細くなつたんだ」と僕が春樹氏に説明した春樹氏は何時か谷崎潤一郎になつて「田端は地震がなくなつて好いな」と云つた僕は谷崎と田樂鍋を隔てて坐つてゐたそばに野上白川君がゐたその外雜誌記者らしい人が二三人ゐた窓の下に稻田と雜木樹が見えた「狸はどうです」と野上君が云つた「狸は出る」と谷崎が云つた——そこで目がさめた「反射した心」を読みながら寝てしまつたのだつた獨りでにや／＼笑つた夢の中のお夏の顔は覺えてゐない病中の御慰みまでにちよいと書いてごらんに入れた 以上

一月十七日

病 我 鬼

中 戸 川 様

六四四 一月十八日 田端から 小林直太郎宛

拜復 玉稿唯今落手すぐに新潮社へ送りしました何分メ切の時間に遅れてゐるので間に合へば好いと思つてゐます 實はあの玉稿も直接あなたの方から新潮社へ御送り願つても好かつたのです又さう願ふ心算でゐました私はその旨 高橋君まで特に念を押して置かなかつた事を大に後悔してゐます今度のあなたの小説の事徹頭徹尾私のインフルエ

ンザが災して思ふやうに御幹旋出来なかつたのは遺憾ですがこれも天運と御詮め下さい私はまだ床を離れられま
ん 頓首

一月十八日

病我鬼

眞木 珧 様

六四五 一月十八日(年次推定)

大阪市東區大川町大阪毎日新聞社内 牧雄吉様
東京市外田端四三五 芥川龍之介

拜啓

目下インフルエンザにて頭痛腰痛、喉痛交々加はり居る次第 玉稿も床の上にて拜見したれど詳しい事は申上げる
事勇氣も出ず 唯、左の諸件だけ高覧に入れぬ

一、誤字脱字少くなりし事結構と存ぬ 但しまだ全く無しとは申されず

二、小説の出来はまづ乙上と云ふ所ですな 出来は二つとも似たやうなものと存ぬ 切支丹関係の史料中文を見つ
けしは御手柄ならん乎

三、概して云ふとあなたの小説は材料の面白さだけありてその材料のこなし方に面白さ少きを遺憾と存ぬ これは
畢境材料をこなす可きあなたの主観がまだ力強くないせいなる可くぬ されば小説をうまく書く修業も勿論大切に
はぬへどもこの方面の勉強も随分御肝要と存ぬ

四、まだあなたは小説を書くのが輕率すぎると存ぬへど如何にや 輕率すぎると云ふは書く時急ぐと云ふ意味はか
りでなく頭の中でまだ十分熟さないものを書いてしまふ意味も有之ぬ その邊の御工夫がつかぬ時は到底傑作は成
し難るべく候間よく御考へなされ度候

大正九年

批評はこれで切上げぬ さてこの前はあなたの字を別人のやうに思つたのは何とも恐縮の至 されど更に僕をして云はしめばあんな字が書けるのに何故何時ものやうな字を書くのですかと云ひたい 何時もの不折がゝつた字よりあの方が余程好いぢやないですか

さう／＼思ひ出した あなたの小説中阿片をのむ所があるが阿片は煙草同様始めてのものには旨いものには無之ぬ（大抵の日本人なら嘔吐の氣さへ催すでせう）その上阿片をのむ位の事は格別大罪惡でもなかる可くぬ オルジアノン・ブラツクウツドと云ふ男の小説に人間の肉を料理して食ふ祕密結社の事あり あんなのもあると大罪惡と云ふ氣が致す可くぬ

唯今血清注射をなしたる所まづ肺炎になる事だけは免れ得べき乎 もうこれでおしまい 頓首

一月十八日

病 我 鬼

牧 雄 吉 様

六四六

一月十九日

森先生 侍史
一月十九日 芥川龍之介

拜啓

友人佐々木茂索氏を御紹介申し上げます

氏は天真堂と云ふ古玩をあきなふ店の御主人で その天真堂の命名を先生に願つた事があるさうですから 實は私が御紹介上げるまでもないのですが氏の何でもと云ふ依頼によりこの狀を認めました

何でも今度主宰する事になつた時事新報文藝欄の用向きで御差支へのない限り先生の御眼にかゝりたいのださうです どうかよろしく御取計らひ下さいまし 右御願ひまで 草々不宣

一月十九日

芥川龍之介

森先生 梧下

六四七 一月十九日 下谷區下谷町一ノ五 小島政二郎様 (葉書)

啓

「炭を割る」の句君一代の名吟我鬼先生一誦 殆病懷を忘る 歸命頂礼々々々々

一月十九日

病我鬼

六四八 一月十九日 田端から 江口渙宛

啓 とうとう流行性感冒に罹つて寝てゐる頭痛腰痛喉痛交々加はつて閉口だそこへ秦豊吉が來て評論集を出したいと云ふのだが君の評論集を出す本屋で秦のも引受けてはくれないだらうか秦は今度獨乙へ行くので過去の仕事の片をつけて行きたいのださうだから部數が少くつても印税が少くつても文句を云ふまい活字にさへして貰へれば本望なのだから原稿は皆で五百五十枚あるが本屋の希望でその中から好いのだけ選抜しても好いさうだ所載雜誌は三田文學と早稲田文學とが主だと云ふ事だ君から一應紹介を願へれば幸甚だと思つてゐる右とりあへず御願ひまでこの手紙を書いた 頓首

一月十九日

芥川龍之介

江口渙君

二伸 寝てゐると落着いた氣になるのは難有いこの二三日うん／＼云ひながらも何處か娑婆を離れた長閑さを

大正九年

味つた秦に貰つた支那の淫書が少しある欲しければ進上するがどうだ「牡丹奇縁」「杏花天」「燈蕊奇僧傳」等
皆一讀の價値のあるものだよまだ書けばいろんな事があるが床の上で面倒だから見合せる事にした 以上

病 我 鬼 拜

六四九 一月二十日 田端から 友常幸一宛

啓 過日は羊羹を難有う まだ御禮狀も上げない内に流行性感冒に罹り未だ床を離れませんこの手紙も寝ながら書いて上げるのです 小説は松の内に拜見しました出来はよくありません民三とお美代との關係を書くにしてもつと簡潔に要領だけ捉へて書いて行かなければ駄目です民三自身にとつては戀愛の思ひ出だからいくら瑣末の事でも面白いかも知れませんが讀者の身になつて見れば退屈する方が當然ですそれから文章は「です」と「だ」とが雜居してゐましたあれもどちらかへ片づけたいと思ひます唯所々の自然描寫だけは決してまづくありませんあれはあなたが歌人として自然を見るのに多少コツを得てゐるからだらうと思ひます

原稿は同封で御返しします頭痛喉痛腰痛等交々加はつて苦しいからこれで擱筆します 頓首

一月廿日朝

芥川龍之介

友常幸一様

六五〇 一月二十九日 田端から 長尾武男宛

啓 御手紙拜見しました遠慮のない所を左に御答へします

東京はあなたのやうな青年の自活するのに存外容易な所ぢやありませんしかしあなたがどうしてもさうしたければ

御説の如く新聞社や雜誌社のやうな所にでも口を御求めになるのが好いでせう唯申し上げて置きたいのはその口も容易に見つからない事と見つけた上でも生活は決して樂ぢやないといふ事です新聞の校正掛なら中學卒業の學力がある以上勤るには相違ありませんしかしこれ又早急には口を見つける事が困難でせう現に私の知つてゐるものにもさういふ口を探してゐるものが二人ありますが私も氣の毒ながらどうしてやる事も出来ません東京はあなたの町よりも或點では餘裕があると同時に或點では又より以上に切迫してゐる所なのです

現在私はインフルエンザで床に就いてゐますこの手紙も床の上で書きました讀みにくい所はよろしく御推讀下さい最後に私はあなたの考へてゐるやうな偉い人間でも何でもないといふ事を申し上げますそれからもう一つ今後返事を要する手紙を御よこしの場合でも紙は元より郵券の封入も御免を蒙りたい事を申し上げますこれで筆を擱きます
す 頓首

一月二十九日

芥川龍之介

長尾武男様

六五一 二月二日 田端から 岡榮一郎宛 (葉書)

明三日午後四時頃一寸參上したし御在宅を請ふ 頓首

芥川龍之介

六五二 二月八日(年次推定) 田端から 井上猛一宛

拜啓 毎度新内の會に御案内下さつて難有く御禮申します今日は是非上るつもりこの雪で田端まで歸る事を思

大正九年

ふと何分寒がりの意氣地なしなので參上する勇氣がなくなつてしまひました右不惡御諒察下さいその中に何とかして下りたいと思つてゐます今天然自笑軒主人遊びに參り下で三味線の音がしてゐる所二階は障子の外の雪行火原稿用紙水仙これから發句でも作らうかと思案中です 頓首

二月八日夕

芥川龍之介

富士松加賀路様

六五三 二月十日 田端から 小島政二郎宛

啓 御伺ひしたき事三件あり

一、宮森麻太郎氏は眞面目にあゝ云ふ文藝觀を持つてゐるにやその眞面目とも冗談とも判然せぬ所應對してゐて甚不安なりもし眞面目ならば不安は一變して恐怖となる可し如何

二、君たちの連中の中に色の白き小肥りの大様なる人あり君と上野のパウリスタにて快談し居りし人と同じきかは似たる心地す僕あの顔好きなり誰だか教へてくれ給へ僕は挨拶されても名前を知らず少し閉口した

三、水上氏のパロディー中井汲氏がアナトオル・フランスと芥川龍之介とを云々したとありどんな事を云々したのにや御存知なら高教を請ふ

右三件御託宣を待つ 謹上再拜

この頃の句

蠟梅や枝疎なる時雨空

二月十日

芥川龍之介

小島先生 梧右

二伸 秀眞先生の色紙出来たり今度御光來を待つて進上仕るべし

六五四

二月十日 本郷區東片町百三十四 小穴隆一君
二月十日 芥川龍之介 (葉書)

紙はたしかに君が持つて行きましたよなくなしたら今度又買つて置きませう君の方の紙へ書いて下すつてもよろしい」折柴の小説俳句を散文にひき直したやうなものですまだ小説道の心得がないですな 以上

六五五

二月十九日 田端から 小林直太郎宛

拜啓 二三日前新潮社から水守君の手紙に添へて私まであなたの原稿を返して來ました何でも編輯がすんだ後だったので割込ませる訣に行かなかつたのださうです私が病氣になつたり何かしてぐづぐづしてゐなかつたら間に合つたのだらうと考へると甚御氣の毒な氣がします來月號の新潮へでもと思ひましたがこれ又當分新進作家の紹介を見合せるとか云ふ事ですから如何ともする事が出来ません就いては原稿は私の手許へ一時御預りして置きませうかそれともあなたまで御返ししませうか御面倒ながら御返事を願ひたいと思ひます尤も差當つてどこへ載せると云ふ目算も何もないのですが、右とりあへず當用のみ 頓首

二月十九日

芥川龍之介

眞木 珧 様

二伸 末筆ながら高橋氏へもよろしく御鳳聲を願ひます目下俗用の多い爲同氏へも委細手紙で申上ぐ可き所御免を蒙らなければならぬと思ひますから 以上

啓

一戰國策——張儀魏王に説いて曰天下の遊士日夜腕を搯し目を瞋らし切齒以て從（合從ですな連衡に對する）の便を言ひ以て人主に説かざるなし人主その辭を覽てその説に牽かる惡んぞ眩せらるゝなきを得んや臣聞く積羽舟を沈め群輕軸を折り衆口金を鑠かしむ積毀骨を銷す云々つまり衆口鑠金と同じです

二「君見ずや宋家の天子鄂王を捨つるを」です鄂王は岳飛の事鄂王に追封され武穆と諡せられたからですだから後にある「兩河百郡非舊主」と云ふのは岳將軍が招討使の任にあつた河南河北を指して兩河と云つたのですしかし宋家はまづいですな前に漢家の來たのだから此處は宋の姓趙を使つて趙家と行きたい所ですそれにしても家字の重なるのは面白くないどうも光瑞先生は僕より神經が粗いやうです大氣焔でせうこの頃高泉 慧林兩禪師の書を手に入ればかゝつてゐるので大分鼻息が荒いのです

それから前に書き忘れましたが沈舟畏積羽は支那の詩に多いインヴェルジョンで積羽畏沈舟と同じですこの種の用法は詩で倒裝句と云ひます左傳に室於怒。市於色。（實は怒於室色於市の意）とあるのが古い所ださうです有名な例は杜甫の

久撫野鶴如雙鬢（實は雙鬢如野鶴）

東坡の

魚鼈化兒童（實は兒童化魚鼈 洪水の詩ですから。）

右御答へまで本があるともつと詳しい註が出来ゐる所學生時代に三國史談の類を大抵賣り飛ばしたので調べたくも調

べられませんこの位で我慢してお置きなさい 頓首

二月廿五日

我 鬼 生

小 島 先 生 梧 右

六五七 三月二日 森幸枝 松隈正子宛〔轉載〕

啓

御手紙拜見しました私はあなた方が考へて御出でのやうな興味のある人間でも何でもありません會つて反て御失望なさらないやうになさい日曜は私の面會日ですその代りいろんな御客が落合ふかも知れませんそれで好かつたらいらつしやい若し外の日だつたら前に御一報下さらないと留守にする惧があります右とりあへず當用のみ 頓首

三月二日

芥 川 龍 之 介

森 幸 枝 様

粧 次

松 隈 正 子 様

六五八 三月三日 田端から 小島政二郎宛（葉書）

島秀才示於予香奩體和歌二首即戲答見贈

我鬼先生枯坐處

松風明月共蒼々

何知老魔窺禪室